

課題(1)「自己表現をどう指導するか」について

岩村 博史

『英語記号づけ入門 第2章 第3節』を拝読して、私にとって「印象に残ったところ」は次の点です。

(1)「英語の時間になぜ日本語の作文を書かせるのか」：日本語から英語への自己表現のステップを踏む意義について。

そもそも外国語学習はその学習の母国語の水準を決して超えることはないし、母国語のちからが高ければ高いほどその学習者の外国語における到達水準も高いのではないかと私はずっと考えてきたからである。(p.43. 1-4)

「英語だから書けない」ではなく、母国語すら私たちは良く書けないのではないかと。(p.43 5-6)

このように日本語で書かせることは、外国語学習の基礎を形成する。日本語ですら書けないことを英語で表現できるはずがないのである。(p.43 12-13)

* * * * *

しかし私は、「日本語で書かせる」ことにはもうひとつ大きな意味があると思う。それは「書く」ことを通じて生徒は自分の思考を練り直し、改めて自分や他人を見つめ直す機会を与えられるし、教師も生徒の作文を通じて今まで自分の知らなかった新しい生徒像を発見し、これまでの自分の指導のあり方を改めて問い直されるからである。(p.43 13-17)

(2) 私が一番印象に残った箇所

私が一番印象に残った箇所は、上記の引用部分の後半である、***以降の部分です。英語の時間に「日本語の作文」から書かせる意義は、寺島先生によれば大きく分けて二つあるとされています。前半部分の内容も、現在の英語教育の現場に於いては蔑ろにされている重要な点であると思いますが、それにも増して私に勇気と確信を与えてもらえるのは、後半部分の「書くことの意義」についての記述です。「書く」ことを通じて自分の思考を練り直し、改めて自分を見つめ直すことができる点に「書く」ことの一つ大きな効果があるという点に、「自己表現」の楽しさや可能性があるのだと知りました。

私はこれまで、「書く」ことは過去のすでに確定している事実を記述するだけだというイメージを持ちがちでした。つまり、「書くこと」によって現在の状況が変わるわけではない、と。そのため、「書く」ことによって、現在の自分の進む方向が拓けて行くというイメージがどうしても持ち難かったのです。例えば、現在においてまだ乗り越えられていない過去のいくつかの事実を「過去のこととして」記すことは、現在を突き動かす力にはなりえない。「書きたくないから書かない・書けない」という表現は、その意味では正しいと思います。もちろん、過去の体験を距離を於いて見つめてみることにより、これからの修正すべき方向・方法を考えるというのは理解できます。それは日々の生活の

実践のなかで、解決・解放の窓が見えたときに初めて、後付けとして、「現在に規定された過去を書く」ということができるだけなのではないか、と。つまり「過去」は変わらない、またさらに「未来」への出口が見えて時間が動き出さない限り、「過去」は記せない、「未来は過去を書くことによってはなかなか変わらない」と。

そうした思いを持ちながら、「自己表現をどう指導するか」の最後に載せられている生徒さん達の「英語と私」、「ことばと私」、「私の要求」を読ませて頂いて、不思議なことに、そうした「未来は過去を書くことによってはなかなか変わらない」という思いが溶けていく感じをもつことができました。自分の「過去」を見つめて記している生徒さんたちの素朴な表現の中に、生きた思いが伝わってくるのを感じました。これらは、ただ単に過去の事実を現在の地平から記述するという気持ちでは書けないものであると感じます。生徒さんたちは書きながら、自分自身の時間が未来に向かって動いているのを感じていたのではないかと思います。(というよりも、私が読みながら、私の中の時間が動いていくのを感じているのかもしれない。)

生徒さんが嫌な体験も含めて過去の体験を事実として「書く」ことに向かうことができるのは、「書いた」ことによって、次に向かうべき自分の姿や他人との関わりをイメージできるからなのではないかと思えます。だからこそ、「過去形として」書くことが必要なのだと。つまり、過去の体験を「書く」ということは、今の自分の進む方向性を見つけて行く作業なのではないかと思えるようになりました。未来に向けて書く視線を得られているからこそ、生徒さん達の文章を読んで、私の心が何かに響いているのだと思います。(私は、課題(2)に取り組みながら、「現在」と「過去」を分けて表現することがなかなかできないでいます。)また、自分や他人を見つめ直すと言えば簡単ですが、自分の思いをこのように表現するまでには、多くの努力が必要であったのではないかと推察します。そして指導される側にも見えない苦労があったことも当然推察されます。

「英語表現」を考える前に「ことばによる表現」を「母語である日本語」によってしてみる。これは、日常なかなか機会が与えられないと実践できないことです。普段、浮かんで消えて行く思いやイメージは、「書く」という行為で留めて行くことによって初めて次への行為の段階に繋がるのだと、実感しました。

またそのことに加えて、教師は生徒の作文を通じて、生徒の新しい人間像に出会えるという素晴らしい面もあること、またその一方で、これまでの自分の指導のあり方も改めて問い直されるていることも厳しく受け止めなければいけないと気付かされました。

そして、寺島先生の本に書かれている「英語による自己表現」のために「日本語の作文」から書かせる二つの意義を総合して考えると、「自己表現」を二つの言語でする(まずは日本語で/また同時に英語でもする)という意識を生徒に持たせることこそが、「言葉の学び」として最も大切なことではないかと思えました。「自分の伝えたい気持ちや感覚を英語ではどう表現できるの?」という思いがあって初めて英語のもつ音や表現の響きも大切にできるのではないかと思います。

(3) 疑問と気付き: 「誰に向かって書くのか」と「日本語を英語に転換させて行く指導

をどのようにするのか」

疑問点が二つ浮かびました。一つ目は、「誰に向かって書くのか」という視点は実はとても重要なのではないか、そして読み手（聞き手）を想定できない場合には「自己表現すること」は難しいのではないか、ということです。「書くこと」は自己内省的な行為ではありますが、「誰に向かって書くか」ということが、無意識的に、やはり重要な要件になっていると思います。自分を表現することはとても恥ずかしい面もあり、それを他人に晒すことは辛いと感じることもあるとは思われます。しかしその反面、そうした思いを受けとめ受容してくれる像が結ばなければ、なかなか書き起こすことは精神的に厳しいことでもあると思います。「内なる自分に向かって書く」ことによってこれまでの自分を整理し、自分を解放させることはできたとしても、それに対する承認や返答があることを期待できてはじめて、「自己表現をする」ということが可能になるのではないかと思います。未来への視線を持ちうるのは、「過去を整理し、未来に向けて構想する自己像・イメージ」を承認・受容してくれる<他者>がいて初めて可能になるのではないかと思います。ですから、その直近の<他者>の一人としての教師が、書かれた内容に対してどのようにフィードバックをするのか、ということがとても大事になってくると思われまます。多様な生徒の自己表現に対して、どのようにフィードバックされてきたのかがとても興味深く感じられました。

二つ目の疑問は、日本語で「書く」訓練をたっぷりしながら、同時に英訳させる際に、多様な生徒の内容に対してどのように英語に転換させる指導をされたのか、という点です。紙数の都合で、この疑問については「自己表現をどうするか」には詳細に説明はされてはいませんが、寺島先生が指摘されるように、従来英作文の教科書や問題集がモデルの英文からの「英借文」の形式をとるのは、こうした内容の豊かな多様性に対応する共通の指導項目がなかなか一般化できないからであると思います。豊かな内容になればなるほど、生徒は自分の日本語を英語で表現してみたいと思うようになるかもしれません。そうなれば、その意欲と姿勢こそが「自己表現」の学びの到達であるとは思いますが。しかしその一方で、そうした内容の特殊性や多様性に個別に対応してゆく難しさも伴われるのであろうかと想像します。一般的な教科書が、「文法項目から」あるいは「場面設定から」の視座から「英語による自己表現」のシラバスを作成するのも、本来の自己表現の核であるべき「母語である日本語から書き起こす」という豊かさの拡がりには、形式的には対応し難い面が伴うからではないかと思われました。逆に言えば、「全て英語で、英語から書き起こさせる」指導ができるのは、よほどネイティブ感覚の強い高い学力をもった生徒を対象に限られるのであって、現行の「英語表現」の教科書に沿って英語のみによる指導を実践する場合には、それぞれの生徒のレベルに於いて、その豊かさを拾い上げて行く実践が見落とされている現状があるということです。生徒が自分の気持ちを精一杯に表現した「自己表現の作文」を「さらに英語で表現してみる」というステップこそが、一番骨は折れるけれども、生徒にも教師にも実りのある「ことばの学び」なのではないかと思われまます。

* * * * *

印象に残った点についての疑問に加えて、「自己表現をどう指導するか」の方針全体を支えている原理についての質問を最後に付け加えさせて頂きたいと思われまます。

教室での生徒の学びの過程を大切に、学びの空間から立ち上がってくる課題を解決し、それを次の学びへと繋げて行く、寺島先生の指導方法・方針にはとても勇気づけられます。何よりも自分もやってみようという気持ちになる、ということ。また、生徒の学びに勇気づけられて、実践そのものが楽しいと感じられるということです。それは、どのような校種であっても、どのような学校で学ぶ生徒であっても実践可能な道標になり得ると感じられるからです。

しかし、現行の「学習指導要領」は、「ことばの学び」として、多くの生徒にとっての母語である現代日本語を軸にして思考や感性を鍛え、そのちからを外国語としての英語の学びに繋げて行くというステップを許容しない方向性があるように思います。

外国語科目の表現である以上、最終的にはその当該外国語で考え、外国語で書き起こして初めて意義があるのだといった方向性を、現行の言語政策には感じます。

しかし教育現場の現状をみる限り、そうしたことは事実上不可能であると思いますし、そうした政策を推し進めることによって、生徒の一番大切な感情や思考の部分がそぎ落とされる危うさがあると思います。高校の外国語科目の多くの教員は、実際には「不可能、あるいは困難だ」と感じているにもかかわらず、現場を破壊する政策であっても「従うふりをする」中で、実際には、日本語を介在させながら生徒のことばのちからを育てているというのが戦略的な対応というところでしょうか。「ことばの学び」として母語から思考を出発させる方向性を、なぜ日本の外国語教育政策は否定するのでしょうか。

「学習指導要領」への批判はさておき、「自己表現をどう指導するか」ということを実際の現場から少し離れて考えてみると、外国語としての英語学習を（広義の）第二言語習得として捉えたときに、「母語の梯子を段階的に外していく過程も必要なのかどうか」という疑問にもつきあたります。母語である日本語から表現すべき内容を見つめ、外国語でそれを表現するというベクトルに対して、簡素であっても敢えて外国語（英語）で初めから表現をしてみる、というベクトルの実践も、双方バランスよくできるのならば必要なのか、という事です。もちろん、日本語が話されている空間の中に英語を話す空間を接ぎ木する危険性や奇異さ、そもそも英語の言語空間を今の日本語が使われている中に埋め込むことができるのか、という疑問は当然あります。ただ、たとえば多和田葉子さんやリービ英雄さんのような異言語の書き手が現代国語(日本語)の教科書の中で紹介されているのをみると、母語である日本語での思考を大切にしながら、外国語の世界に浸ってみる体験も、「自己表現の指導」の射程に入れるべきなのかどうかと立ち止まることもあります。現場の中では困難が伴いますので普段は意識しませんが、「異言語で敢えて書くことを自己表現の指導の最終目的にすべきなのか」という疑問を持つのは、私自身がそうした異言語での直接表現による異化体験が十分にできていないだけだからかもしれません。

以上、大変長くなり、まとまりのない文章になってしまいました。